令和４年度　日本大学スポーツ科学部　個人研究費　研究実績報告書

所属： スポーツ科学部　競技スポーツ学科
資格： 准教授
氏名： 田中　竹史

研究課題名	ことばを通じてヒト科ヒト属の認知能力を探る
研究目的及び研究概要	0.　研究の背景 Mora et al. (2011) によると、地球上には真核生物が約874万種存在すると推計されている。それらの多様な生き物のうち、ヒト（ヒト科ヒト属）は唯一ことばの使用が可能な生物種であり、ことばはヒトという存在を際立って特徴づけている。たとえ進化の隣人であるチンパンジー（ヒト科パン属）のように、学習能力が高く様々な点でヒトに比肩しうる認知能力を持つ生物種であっても、音声言語であれ手話言語であれ言語の使用は不可能であり（松沢 2011）、どんなに優れたコンピュータ・AIであっても自然言語を理解することは（技術的に困難なのではなく）原理的に不可能である（Poibeau 2017; 酒井 2019; 川添 2020）。したがって、言語研究はヒトという生物種の特質を明らかにするのに最も有効な手段であるといえる。 1.　研究の目的及び概要 近年の日本の言語教育、特に英語教育では、大津（2022）、久保田（2018）などで議論されるような外国語教育に関わる「誤解」や「幻想」が根強く、学習対象の言語である英語のみを使用した単一言語使用のアプローチ、直接教授法が依然として話題となっている。しかしこのようなアプローチは、19世紀以降、政治的、商業的理由により興盛となった教授法であり、教育的、教授的根拠を持つものではない（Cook 2010）。また、単一言語使用の教授法の弱さを指摘し、学習者の既得言語である母語の重要性を主張する研究も増えている（Stern 1992；Butzkamm 2001；Brook-Lewis 2009；Hall & Cook 2012）。 本研究では、文献調査により「外国語の学習には母語の活用が不可欠であり、母語は外国語の学習を促進させる重要な資源である」という主張の可能性を追求する。
研究実績の概要 研究の進捗状況・得られた成果・今後の課題・研究実績等	2.　得られた成果 本研究では、学習者の既得言語である母語を外国語学習にどのようにつなげていくのかについて、CEFRの主張する複言語主義と、その日本における展開である日本型複言語主義（大津・窪薗 2008；大津他 2019）の立場からその可能性を追求する。この立場のもとでは、外国語の学習にとって重要な役割を果たすのは「ことばへの気づき」（Pratt & Grieve 1984）であり、気づきを育成するための理想的な対象が直感の利く母語であると考える。外国語の学習は、母語によるきっかけ作りによって育成されたことばへの気づきを利用することにより容易になるのである。本研究では、そのような気づきの育成には、学習者の母語を例としたあいまい性の判断、複合語の解釈、各種構文の文法性判断、代名詞の先行詞の判断などを活用することが有効であると議論する。 3.　今後の課題 上記の主張をより精緻化し、現実の外国語教育の現場における実践として展開することが望まれる。 4.　研究実績等 上記研究の成果についてはその一部をオンライン開催での研究会・学習会にて公表した。